『獻祖遺跡　有馬日記附』の中の『太平記評判』の記事について

武田昌憲

一　はじめに

佐賀県立図書館・鍋島文庫蔵の『獻祖遺跡　有馬日記附』は、鍋島藩藩祖の直茂の孫で蓮池支藩初代藩主になった鍋島直澄（獻祖）（元和元年（一六一六）～寛文九年（一六六九）の事跡を記したものである。直澄の父は佐賀藩主鍋嶋勝茂でその五男として生まれた。彼の在世中に島原の乱があったので、二つの作品が一冊に纏められた（合綴）のであろう。外題に『獻祖遺跡　有馬日記附』と書名が付いたのもそのためであるが、図書館の一般向け複製写真版では『有馬一亂日記』で開架されているので注意を要する。現物は二点あり（注1）、改行、その他位置も同じでほとんど同文である。なお直澄の母（高源院）は徳川家康の姪の子にあたり、同腹の兄忠直の子光茂が本藩を継いでいる。直澄は島原の乱でも鍋嶋甲斐守として参戦・登場する。乱後の寛永十九年に父勝茂から五万二千石を分与され、佐賀郡蓮池に居住し蓮池藩を立て初代藩主となる。

二

まず、今回は字数の関係で本書の前半『有馬一乱日記』（墨付一丁～四十九丁）から続く、直澄の事跡を記した実質的な『獻祖遺跡』（墨付五十丁～百五十二丁）の序文と『太平記評判』の記事だけを指摘しておきたい。

序文相当文は以下のようになる。

窺察古今安危之来由覆而無私
天時明主将之法也世載而無棄者良臣之
令也故法令全備守国郡若其術違則

雖有位不久況無レ威也後昆観而不可

一見して、これは『太平記』の序文

蒙竊ニ採テ ニ古今之變化ヲ 一、察ニ安危之來由一、覆而無レ外天之德也。

明君體 レ之保 二國家 一。載而無 レ棄地之道也。良臣則 レ之守 二社稷 一。。。。。。。。。。

を意識した文とみなすことができる。このような人物伝『獻祖遺跡 有馬日記附』の編集・作者は『太平記』を模倣した作品を考えていたものと推察される。

本文の冒頭も

一 本朝人皇之初神武天皇（神日本磐余彦（カンヤマトイワレヒコ）火火出見尊（ホホデミノミコト）ト奉レ号）ヨリ百九代元和ノ帝ヲハ大上天皇今法王ト奉レ号

一 時ニ征夷大将軍新田家康公也リ（以下略）

とあり、これも『太平記』の本文冒頭部

爰ニ本朝人皇の始、神武天皇ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇ノ御宇ニ當テ、武臣相模の守平高時ト云者アリ。

を強く意識している。但し『太平記』では冒頭に登場する平高時を悪者としているが、本書では家康を「智仁勇ノ三德ヲ備」えた、まるで楠木正成のような人物だから天下を統一できたと寿ぐのはこの時代の「お約束」である。

三

この中で墨付本文九十五丁ウに『太平記評判』の記事が載っていたので引用してみる。

一 太平記ノ評判未タ秘書ノ時キ写シ給フ此比マテハ武城ノ御城

小松中納言殿酒井讃岐守殿慈眼大師 寺沢兵庫殿

此五部ノ外カ他ニナシ如 レ此稀ナル書求メ玉ヒ御読書

数篇ニ及テ或時ノ玉ヒケルハ此書ヲ法花法印諸部ヲ

集メテ一部トシ末世ノ武士ノ戒トセン志書ニ見ヘ侍ル

亦ハ日本無双ノ武将楠正成ノ智仁勇ノ三德ヲ備ヘ

子孫代々忠ヲナセシ事ヲ顕ンカ為ナリ此書ヲ読セ
ハ七
書等ノ釈ヲ不聞ト云フ共其心ヲ得ン然レトモ愚痴(チ)
短才
ノ族悪ク心得テ是ヲ読セハ悪ク侍ン事無　レ疑其
故ハ人ノ
勇臆ニ相目利ノ事ヲ書ス正成ハ大将ノ賢将ニテ己
レカ
明鏡ニ写シテ目利ヲセラレタル故ニ無　二相違
一然ルヲ手前ノ
鏡ハ暗(クラク)シテ磨事モナク人ノ善悪ク計リ心ヲ付テ見
ハ烏カ
鵜(ウ)ノ真似(マネ)ニテ水ニ溺レ（ン）ニ事不　レ可　レ有
　レ疑其上へ将ニ依テ目
利ノ心得アシクテ損(ソン)多カラン亦タ當国ノ者ハ中下
共ニ己カ
身心ヲ正(タク)ス事ハ少シモナク傍輩(ホウハイ)ノ非ヲ見ルサケス
ミノ曲尺(カネ)
トナシ妬(ネタ)ミ強クナツテ互(タカヒ)ニ云諍(アラソ)ハン事疑ヒナシ諸
国モ国風ニ
依テカク有ルヘシ必ス後年ニ思ヒ當ル事有ヘシ一
部ノ内ニモ
恩地ノ巻ハ就　レ中邪智短才ノ族ヲ見スル事勿レ
予モ此
後ハ披見スマシキソ然レ共此ノ書軈(ヤカ)テ板(ハン)木ニ起ス
ヘシ是ヨリ
捨タク侍ンソ惣シテ書ニハ文ノ飾(カサリ)ト練(ネリ)レタル将士
ノ替リ有リ
此評判ハ太平記ノ時代ヲ指シテ乱ン世ノ将士ヲ批
判ス夫レ
ヲ静謐ノ世ノ人ト然カモ事ニ不　レ逢ハ輩ヲ其侭
ニテ用ヒ侍ラハ
地ノ底(ソコ)ニ堕(ヲ)ツヘシ其ノ故ハ近代名将ト云ヒ傳ヘシ
甲州ノ
信玄公ハ村上ノ義清ト九ヶ年戦ヒ相州ノ北条氏康
公
ハ上杉則政公ト十年戦ヒ北越ノ謙信公ハ信玄亦ハ
能登
越中衆ト十五年戦ヒ尾州ノ信長公ハ美濃衆ト九年
戦ヒ玉ヒテ良将ト云レ玉フ是才智大ニシテ鍛錬(タンレン)ヲ

シ給フ
故ナリ然ルニ短才ノ輩ラ古書ヲ見テ其コトク合戦スヘキト
思フハ石ヲ懐キテ渕ニ入ルナルヘシ大ニ誤リト云ツヘシサレトモ
古ヘヲ師トスルハ常ナリ其ノ上ニテ時ト国風ト人ノ軽重
強弱トヲ分別シテ治乱共ニ全キ事ヲ工夫スヘシ如此
ニ侍ラハ亦重寶ノ書也リ一篇ニ捨ルモ用ルモ共ニ非ナリ
遠慮工夫ヲ加ヘテ相應ノ二字ニ納メヨト仰ケル也

これによると、最初『太平記評判』は秘書として江戸将軍家と小松中納言殿（加賀藩主・前田利常　文禄二年（一五九四）～万治元年（一六五八））、酒井讃岐守殿（幕府老中・酒井忠勝　天正十五年（一五八七）～寛文二年（一六六二））、慈眼大師（天海僧正　天文五年（一五三六）？～寛永二十年（一六四三））、寺沢兵庫殿（唐津藩主・寺澤広高　慶長十四年（一六〇九）～正保四年（一六四七））の五部しか存在しなかったとある。これを直澄はどういう手づるかわからないが、入手し、おそらく書写させたのであろうか、「御読書数篇ニ及テ」塾読したことがわかる。五部の所持者の生存時代を見ると、島原の乱前後あたりまでが重なる。出版されている『太平記評判』巻四十末には「文明二年八月下旬六日」の日付と「元和第八年暦中夏上澣三蓂」の日付のある二つの奥書があり（注2）、特に二つ目の奥書には「大運院大僧都法師」が名和長年の遠祖「名和正三」から本書を受読して、それを唐津城主の寺沢広高に三カ年かけて伝授したことを記している。この時元和八年（一六二二）という奥書を信じるとすると、『獻祖遺跡』のいう五部の時代とも重なる。また、この奥書には寺沢家の関わりが書かれているので、当然寺沢広高もかなりの原本に近いものを持っている可能性もあり、直澄は直接近隣の寺沢家に借りたのかもしれないし、或いは江戸で借り受けたのかもしれない。実際、寺沢広高の後室として入った、相馬藩主義胤の姉とのかかわりで、島原の乱後、『太平記評

判』を相馬家が寺沢広高から借り受けて書写している例もある（注3）。徐々に『太平記評判』が流布して行く様子が知られてくる。また、この作品が後世（正保二年（一六四五）・寛文十年（一六七〇）等）出版されたことに対して、浅い知識の者が読むことによるその悪影響が出ることを心配している表現があることから、出版されてからの記述とも見て取れる。しかも直澄はこの書の危険性を早くから指摘。すなわち、手軽にこの書を読んで真に受けることを危惧し、自分もこの書を他人に披見しないようにと思っている中で、特に「恩地ノ巻」には注意を要すると指摘している。このことから直澄が見た『太平記評判』には「恩地ノ巻」が付いていたことが知られる。やがて「然レ共此ノ書軈（ヤカ）テ板（ハン）木ニ起スヘシ」と板木で出版されることを予想していることからその需要の多さを見越してもいる。そこで最後に「時と国風と人の軽重・強弱」を計って用いれば「重宝」となると説いている。一般の人が読むと誤解を受ける恐れのある書物として、早くから注意している様が見受けられる。『太平記』にも負けず劣らぬ面白い内容の作品であるが、読みようによっては誤解されかねない『太平記』以上にスリリングさを持ったものでもある。

以上の内容をみると、直澄は『太平記評判』の「評判」をしているのであり、『太平記評判』の享受の早い例として、この記録『獻祖遺跡』が評価できるかもしれない。

四　終わりに

鍋嶋家は唐津の寺沢家と地理的にも近く、また島原の乱でも一揆鎮圧のために鍋嶋家から大軍を出兵させているなど関係が深いものがある。島原の乱後、寺沢家から其の好意で『太平記評判』を借り受けたかもしれない。ひょっとしたら、島原の乱が、『太平記評判』の流布に一役買っていたかもしれない。興味は尽きない。

『獻祖遺跡』は形式上は冒頭部『太平記』を意識して模している。中身も百二十二丁オ「太平記ハ細河三井寺合戦寄テ寄ラルヽト云々近キ比ニハ三州長篠ニテ信長勝頼ノ合戦等ナリ」と『太平記』を引用す

る例もある。が、また一方で恩地左近の巻を含む『太平記評判』を気にかけた条目を含むことは、如何にこの時代、『太平記評判』が注目されていたかを示す一例ともなるだろう。こうなると、見かけ上『太平記』の影響を単に受けているから、中身も同様であるとはいえない状況であることが分かる。今後の太平記の影響・研究に『太平記評判』は欠かせないのである。すなわち、『太平記』の読者は『太平記評判』もほぼ同時に目にしているということを意識すべきである。

直澄は『太平記評判』について「此評判ハ太平記ノ時代ヲ指シテ乱ン世ノ将士ヲ批判」した作品であるとも指摘している。

島原の乱前頃の『太平記評判』の流行は加美宏氏が指摘される（注4）『重篇応仁記』の序文に見えるように「元和寛永の比、北国に法華法印日勝と云し僧、自身偽作せるか、又尊信を求めん為か、白州大山の麓にて名和伯耆守長年の遠孫、陰逸の人より伝へたりと称し、太平記評判理尽抄と云ふ書を出せり」でも、元和寛永期に本作品が出てきた＝知られるようになったと指摘している。同様に「獻祖遺跡」においてもそのことが確認出来そうである。後期軍記・戦国軍記と、『太平記』および『太平記評判』との関わりは今後も検討していく必要がありそうである。

注1　なお、佐賀県立図書館での本書の請求書名は『有馬一乱日記』、請求記号は「鍋　３５７・３」となっている（『佐賀県立図書館所蔵鍋嶋家文庫目録　郷土資料編』参照）。本文にも述べたが、二冊あるので簡単に紹介しておく。

（ア）外題『直澄　獻祖遺跡　有馬日記附』（内題「有馬一乱日記」・図書館整理番号　鍋３５７・３・９７９（ロ・４・８６））の一冊と、

（イ）『獻祖遺跡　全』（内題「獻祖遺跡　有馬一乱日記」・図書館整理番号　鍋３６７・３・鍋（ロ・４・８７））の一冊がある。（イ）は。１５７丁ウに本文とは異筆で「此本者蓮池之家記　嘉永元年十月寫焉」とある。筆跡は複数で書写して

いる。おそらく（ア）（またはその原本）をほとんど真似て書写（影写）したものである。
また、本文中の『太平記評判』を本来ならば『太平記評判秘伝理尽鈔』というべきであろうが、ここでは本書にならって『太平記評判』と記しておく。

注２　加美宏『太平記の受容と変容』（翰林書院　平成九年）第五章『太平記評判』考説　などに詳しい。

注３　武田昌憲「島原の乱の合戦・覚書（稿）―三宅藤兵衛の場合と『太平記評判』のこと　など―」（茨女国文　１８　平成十八年三月）

注４　今井正之助・加美宏・長坂成行　校注『太平記秘伝理尽鈔』１（東洋文庫・平凡社　平成十四年）解説（加美宏執筆）３８１頁。